

葛文綺 著

中国人留学生・研修生の
異文化適応

〈漢水社・二〇〇七年二月・一四三頁〉

異文化間コミュニケーションは難しい。「同文同種」の幻想を互いに近代の一時期に抱いたことがあるから、より難しい。さらに、その相手が世界の中心に君臨した歴史と、そこから転落した歴史を持ち、互いに諍いあつた歴史を持つため、優越感や劣等感だけでなく無用の歴史意識がつきまとい、さらに難しい。

著者は一九七〇年上海に生まれ、九一年来日、その後横浜市立大学・名古屋大学大学院で研鑽を積み、現在宇部フロンティア大学で助手についている元中国人留学生である。本書は「日本で過ごした一六年間の生活を総まとめしたもの」であるという。そして本書は、著者の博士論文が元になっていゝる。本書の概要は、目次で示すと以下

の通り。

第一章 序論—研究の理論的背景

第二章 中国人留学生の異文化適応

第三章 留学後における対ホスト国

イメージの変化に関する研究

—中国人留学生と日本人留学生

との比較を通して

第四章 中国人研修生の対日イメージ

ジおよび適応に影響を与える個

人属性

第五章 総合的考察

著書は、中国人留学生は総体として年齢層が高く、経済的な困難さやアルバイト先での差別体験、さらに日本の文化や日本そのものとは無関係な留学動機に加え、歴史問題も、日本への適応に影響を与える要因であると指摘する。また研修生の場合は、留学生以上に日本語能力に問題があり、それが対人関係の希薄さに結びつき、さらに留学生より低学歴、貧困地区出身者が多いことから、留学生より格段厳しい状態におかれている。

著者の研究は先行研究を土台に、ア

ンケート調査と聞き取り調査を併用し、社会調査の基本を手順通りに進めている。そのデータは統計表で示され計量分析が加えられて、客観性を高めている。また、調査対象とのやりとりから、個々人の顔が浮かんでくる。社会科学において、時折見られる類型化による非人間化の危険に陥らない努力である。さらに、中国留学における日本人の中国理解、異文化適応の問題も扱い、示唆に富んだ研究となっている。

とまれ、地方都市はもろろん農村でも中国人留学生・研修生が珍しくない現在の日本で、彼らの一部がときおり悲劇的な事件を起こすことがしばしば報じられるが、本研究は異文化適応の視点からそうした現状を理解する上で有益な視座を与えてくれるのではないだろうか。日本語表現も、ほとんど違和感はなかった。ひとつ注文を付ければ、中国人留学生・研修生の非アジア世界における異文化適応について、著者の見解をお聞きしたいと思う。

(三好章)